

# 辞結合における慣用表現の文法的考察

祢津 仁美

## 1. 課題

日本語には形が同じでも意味用法の違う表現がたくさんある。なかでも、辞（いわゆる助詞・助動詞）の結合において生じる慣用表現は、その表現だけを見ても意味用法の違いがわからず、日本語を初めて学ぶ人にとって、また、計算機で処理をする場合などには、その使い分けは難しいものである。例えば、次の用例AとBとは区別すべきであるが、「とは」だけに着目して、格助詞「と」と係助詞「は」であると説明しても二つの用例の違いはわからない。

A 世捨て人とは世を捨てた人ではない、世が捨てた人である。〔表現 46〕

B 世捨て人とは友達になりたくない。

用例Aの「とは」には慣用的な意味が生じているが、この「とは」が使われるには何らかの条件が存在するであろうし、その条件が明らかになれば、このAとBとは弁別できるはずである。本稿はこのように辞結合において慣用的な意味が生じている表現を集め、その表現がどのような条件のもとにほかのものと弁別できるかを探ることを目標とする。

なお既に例文の出典を略号で示しているが、以下、袖括弧の中に文献の略号とページ数とで表わす。文献の略号は次の通りである。

初恋：神西清訳（1952）『はつ恋』新潮文庫

手紙：斎藤芳樹（1971）『手紙の書き方 改訂版』明治書院

数学：寺阪英孝（1977）『現代数学小事典』講談社

確率：黒田孝郎ほか（1984）『高等学校の確率・統計』三省堂

アン：『an・an』1989-11

天：「天声人語」1989-7

朝：朝日新聞 1989

文法：鈴木一彦・林巨樹編（1973）『品詞別日本文法講座 9 助詞』明治書院

表現：森田良行・松本正恵（1989）『日本語表現文型』アルク

説明の便宜のために、出典通りではなく、適宜省略や改作をした例文もあることを、断わっておく。

## 2. 慣用表現の条件

ここに示した 表1 慣用表現の条件 は新聞・雑誌・小説などから採ったデータをもとに慣用表現の用法や特徴を意味と文法との両面から考察した結果をまとめたものであり、本稿で扱った慣用表現であるかどうかの弁別条件が記してある。

表1 慣用表現の条件

$\alpha$  : 慣用表現の前要素  $\beta$  : 慣用表現の後要素 ー : 存在しない意

(空欄は特に言及する必要のないことを表わしている)

慣用表現	文法的条件		意 味 的 条 件		そ の 他
	$\alpha$	$\beta$	$\alpha$	$\beta$	
バカリニ	埋込句	句	$\beta$ の原因 事実の描写 句末はタが多い	好ましくない結果 事実の描写	$\alpha$ バカリニが $\beta$ を副詞的に修飾
バカリカ	語または句	語または句	$\beta$ よりも程度の軽い語句	$\alpha$ よりも程度の重い語句 サエ・マデ・モが来やすい	$\alpha$ と $\beta$ とを接続する役割
トバカリ	体言相当の句	ニまたは ε <sub>5</sub> その後句	引用表現的なものの 会話文体であることが多い		情況化されて $\beta$ を副詞的に修飾
ンバカリ	句 句末は動詞未然形		事実ではなく喩えである句		副助詞の用法である
タバカリ	句 句末は動詞連用形		完了した事実の描写		情況語にはならない
ダケニ	埋込句	句	理由 事実の描写 サスガ・ヤハリが来やすい	結果	$\alpha$ ダケニが $\beta$ を副詞的に修飾
トヤラ (副)	語または句		はっきりしないこと 例示		$\alpha$ 以外にも同様のものが想定できる場合が多い副助詞的な役割

トヤラ (終)	体言相当 の句	—	人から聞いたこと 伝え聞いたこと	—	必ず文末
トカ (副)	語または 句		はっきりしない こと 例示		$\alpha$ 以外にも同様の ものが想定で きる場合が多い 副助詞的な役割
トカ (並立)	語・句・ 格表示の 連系・情 況化の辞	トカ	トカが受けるものの内容が似ている		トカが二個以上 ある その他のものも 想定できる
トカ (終)	体言相当 の句	—	人から聞いたこと 伝え聞いたこと	—	必ず文末
カモシ レナイ	語または 句	述態辞 添加辞	不確かな内容 ヒョットスルト ・モシカスルト ・タブンなどが 来やすい		文末に近いところにある
		述態辞 添加辞 接続助詞	自分の考えに反 する内容 ナルホド・タシ カニなどが来や すい	ガ・テモ・ケレ ドモなど逆説を 示す語 自分の考えを示 す内容	
トモ	句	—	確信のある内容	—	必ず文末
テハ (仮定)	句	句	してはいけない 内容 すべきでない内 容	悪い事態 困ル・失礼ダ・ 大変ダなど	$\alpha$ テハが条件を 示す
				禁止を示す語句 イケナイ・ダメ ダ・ナラナイな ど	
			勧誘の内容 「試みる」のミ ルが来やすい	勧誘を示す語句 ドウカ・イカガ など	
テハ	句	句	既に行なわれた	悪い事態	$\alpha$ テハで条件を

(確定)			事実 理由を示すこと が多い		示す
テハ (反復)	句 句末 は動詞連 用形	句 句末 は動詞		$\alpha$ と逆または連 続的な動作	「～ては～」が 繰り返して使わ れることもある
トハ (定義)	体言また は体言相 当の句	句		句末が断定的 ダ・デアル・ス ルコトダ・スル モノダ	$\alpha = \beta$ である
トハ (主題)	体言また は体言相 当の句	句	客観的な事実	$\alpha$ についての話 者の判断 感情・考えを示 す語が多い	
トハイエ	—	文	—	前文と矛盾する 内容	前文の逆説を示 して文を接続
	句	句		$\alpha$ と矛盾する内 容	$\alpha$ の逆説を示し て句を接続
ニハ (尊敬)	語	句	尊敬すべき人物 (先生など) 敬称	敬語表現が使わ れる	主に手紙文で使 われる
ナイコト ニハ	句 句末 は用言未 然形	句	すべきである内 容	悪い事態	条件を示す ニハの前後とも 過去形にならない
ニハ (並立)	体言相当 の用言	句 用言は $\alpha$ と同じもの		用言の後に逆説 の意の語 ガ・ シカシなど	$\beta$ で文が終わっ ていても必ずシ カシなどが来る
ニハ (目的)	埋込句	句	タメ・ノがニハ の直前に来うる	$\alpha$ のためにすべ きこと 句末はナケレバ ナラナイ・スル トヨイが多い	
カラニハ	句	句	客観的事実・結 果の描写	$\alpha$ についての話 者の判断 句末はスベキダ ・ツモリダが多 い	

### 3. 表1の解説

ここでは、先に示した 表1 慣用表現の条件 について具体的に例文を挙げながら解説する。

#### (1) バカリニ

# 1 在学保証人をお願いしたばかりに、ご厄介をおかけした。〔手紙 11〕

$\alpha$ 「在学保証人をお願いした」が、 $\beta$ 「ご厄介をおかけした」という結果となった原因を示している。バカリニによって原因を表わす場合、結果である $\beta$ は# 1の「厄介をかける」のように悪い結果、好ましくない結果になる。例えば「一層親しくなった」というような良い結果を表わす句は絶対に来ない。また、 $\alpha$ も $\beta$ も原因や結果を示すものなので話者の感情や判断が入る句ではなく事実を描写した句になる。なお、 $\alpha$ の文法的な条件を埋込句としたのは、バカリニが $\alpha$ を受けて、 $\beta$ を副詞的に修飾する情況語となっていると考えられるためである。

#### (2) バカリカ

# 2 私を酔わせたばかりか、陽気にさえした。〔初恋 93〕

このバカリカは、バカリカの後に来る $\beta$ よりも程度の軽いものを示し、 $\beta$ を強調する表現である。# 2で説明すると、 $\alpha$ 「酔わせた」は $\beta$ 「陽気にさえした」よりも酒を飲んだときの結果という観点からすると明らかに程度が軽いものであると話者は考えており、「その程度の軽いものだけでなく、もっと程度の重いものまで」ということを示しているのである。そのため、 $\beta$ には添加や極端な例を示す副詞や助詞（オマケニ・サエ・マデ・モなど）が来ることが多く、より強調の意を強める働きをしている。文法的には、バカリカが $\alpha$ と $\beta$ を接続する役割を果たしており、語の水準と句の水準の接続を担うことができる。# 2は句の水準の接続を担っている例である。

#### (3) トバカリ

# 3 時間よ止まれ、とばかりに遊んでいたのだった。〔朝 10・19〕

トバカリのトは引用を受けるトであり、集めたデータにはトの前要素の $\alpha$ が会話文体であるものが多かった。引用表現は一つの体言であると考えたため、文法的条件の $\alpha$ は「体言相当の句」とした。# 3の $\alpha$ 「時間よ止まれ、」も引用符はついていないが、引用表現と思われる。この $\alpha$ がトバカリに係って $\beta$ を副詞的に修飾している。したがって、# 3の $\beta$ 「に遊んでいたのだった」のニは情況化によって生成される辞である。 $\beta$ には、# 3のようにニに続いて句が来るものと、すぐに句が続くものとの二つのパターンしかなく、すぐに句が続く場合は、 $\varepsilon_5$ が情況化によって生成される辞である。

#### (4) ンバカリ

# 4 こっちが泣き出さんばかりだった。〔初恋 69〕

意味的条件の $\alpha$ を「事実ではなく喩えである句」としたのは、 $\alpha$ の末には動詞の未然形が来て、実際にはその動作をしてはいないがそうなりそうであることを表わしているからである。# 4では $\alpha$ 「こっちが泣き出す」の未然形が来て、もう少しで泣き出してしまいそうであることを示している。なおンバカリは、# 4では文の中核的述素である

が、集めたデータの中には状況語の末に来たりニ格やヲ格に立っているものもあり、副助詞のバカリの性質をそのまま受け継いでいるようである。

(5) タバカリ

# 5 そこへ引っ越したばかりのところだった。〔初恋 115〕

タバカリは動作の完了を示す慣用表現であり、 $\alpha$ には完了した事実を描写した句が来る。# 5では $\alpha$ は「そこへ引っ越す」であり、 $\alpha$ の句末は動詞の連用形になり、完了の助動詞であるタに続く。# 5は $\alpha$ がタバカリとともに「ころ」を連体修飾している例であり、データには格要素になっているものもあったが、状況語の例は一つもなかった。

(6) ダケニ

# 6 さすが良家の子息だけに気高く美しいところがある。〔表現 101〕

$\alpha$ には $\beta$ という結果に対する理由が来る。# 6で説明すると $\beta$ 「気高く美しいところがある」のは $\alpha$ 「さすが良家の子息（である）」という理由によるということである。また $\alpha$ にはサスガやヤハリなどの強調を表わす語が含まれることがあり、これらの語があるときにはダケニがこの意で使われていると考えられる。なお、文法的条件の $\alpha$ を埋込句としたのは $\alpha$ ダケが $\beta$ を副助詞的に修飾する状況語であるためである。

(7) トヤラ（副助詞的なもの）

# 7 この私だって思わず好感とやらを持ってしまう。〔アン 22〕

トヤラは $\alpha$ に語や句が来て、はっきりしないことや例示を表わす表現である。# 7では $\alpha$ は「好感」という語であり、はっきりと「好感」と言わずにぼかして言うためにトヤラを挿入していると考えられる。 $\alpha$ が例示である場合には、 $\alpha$ 以外にも同様のものが想定できる。このトヤラは副助詞ナドと入れ換えてもさほど意味が変わらず、用法も体言をつくる接尾語的な働きをするので、副助詞的なものとした。

(8) トヤラ（終助詞的なもの）

# 8 彼はどこへともなく立ち去ってしまったとやら。〔表現 171〕

トヤラのトは引用を受けるトで、人から聞いたことや伝え聞いた内容を表わす句を受ける。# 8では $\alpha$ は「彼はどこへともなく立ち去ってしまった」である。 $\alpha$ の文法的条件を「体言相当の句」としたのは引用を一つの体言と考えているためである。このトヤラは必ずそれ自身が文末に来るため、 $\beta$ は存在しない。

(9) トカ（副助詞的なもの）

# 9 キャンプとかしてみたいですね。〔アン 14〕

(7)のトヤラと似た表現である。# 9の $\alpha$ は「キャンプ」という語であり、一つの例示である。そのため「キャンプ」以外にも「山登り」や「魚釣り」などが想定できる。

(10) トカ（並立助詞的なもの）

# 10 「これ」とか「彼」とかの代名詞が文章を書きやすくした。〔数学 18〕

他のトカと違う特徴は、並立助詞的なトカの場合、トカとそれを受ける句が二つ以上あることである（ただし、最後のトカは省略される場合もある）。基本的には副助詞的なトカと用法は同じで、例示が二つになった場合にトカが並立助詞的な役割をしてい

る。#10の $\alpha$ は「これ」と「彼」であるがこの例文からもわかるようにトカによって並んで示される $\alpha$ は内容や意味が似ていることにも特徴がある。 $\alpha$ の文法的条件の「格表示の連系・情況化の辞」はデータの中にはなかったが、水谷文法でこのトカを重畳辞と呼んでおり、その前要素に「格表示の連系・情況化の辞」があるのでこの表にも記しておいた。

(11) トカ（終助詞的なもの）

#11 彼はどこへともなく立ち去ってしまったとか。〔表現 171〕

(8)のトヤラと似た表現である。#11の $\alpha$ は「彼はどこへともなく立ち去ってしまった」で、伝聞の内容である。(8)のトヤラと同様にこのトカも必ずそれ自身が文末に来る。

(12) カモシレナイ

#12 ひょっとすると父は予感していたのかもしれない。〔初恋 44〕

#13 確かにヤナ女かもしれないけれど、私はキライではない。〔アン 27〕

カモシレナイは不確かなことを示す推量の表現であるので、 $\alpha$ には不確かな内容の語や句が来る。#12の $\alpha$ 「ひょっとすると父は予感していたの」のように、ヒョットスルトやモシカスルト、タブンなど不確かであることを示す副詞が $\alpha$ の中に含まれていることも多い。逆に断定的な「絶対に」などの副詞が含まれることはない。また、カモシレナイには後にガやテモ、ケレドモなどの逆説を示す語がついている場合も多く、これは自分の考えに反することを $\alpha$ で示し、それを一応認めた上で自分の考えを主張する用法である。#13で説明すると、 $\alpha$ 「確かにヤナ女」カモシレナイといったん反対の意見を認め、 $\beta$ 「けれど」で $\alpha$ を否定して自分の意見「私はキライではない」を主張しているということである。この場合、 $\alpha$ には#13のようにタシカニやナルホドなどが来やすい。なお、 $\beta$ の文法的条件にもあるように、カモシレナイの後には述態辞と添加辞が来うる。また、#13のような場合は接続助詞も来うる。

(13) トモ

#14 おやすい御用ですとも。〔初恋 45〕

$\alpha$ に確信のある内容を示す句が来て、「もちろん〜だ」の意で使われる表現である。必ずそれ自身が文末に来るので $\beta$ は存在しない。#14の $\alpha$ は「おやすい御用です」である。

(14) テハ（仮定条件）

#15 「いつときの感情」と認識しては困る。〔天 7・6〕

#16 女王様のそばを離れてはいけない。〔初恋 91〕

#17 なにか書いてみてはどうだろう。〔表現 271〕

テハは仮定条件を示すものであるが、ここでは $\beta$ に来る句の種類によって三通りに分類した。まず、#15の $\beta$ 「困る」のように $\beta$ が悪い事態を示す句である場合があり、この時 $\alpha$ はしてはいけない内容やすべきではない内容を示す句になる。#15では $\alpha$ は「いつときの感情」と認識する」である。次に、#16の $\beta$ 「いけない」やダメダ、ナラナイ

など、 $\beta$ が禁止を示す句である場合があり、この場合も $\alpha$ にはしてはいけない内容やすべきではない内容を示す句が来る。#16では $\alpha$ は「女王様のそばを離れる」である。最後に、 $\beta$ に勧誘を示す句であるドウカやイカガカなどが来て、 $\alpha$ にその勧誘の内容を示す句が来る場合がある。#17がその例で、 $\alpha$ は「なにか書いてみる」、 $\beta$ は「どうだろう」である。#17のように $\alpha$ の末には「試みる」の意の「みる」が現われやすい。

(15) テハ（確定条件）

#18 こんなに外来語が入ってきては、伝統的な日本語が失われてしまう。〔表現 95〕

このテハは確定条件を示すものなので、 $\alpha$ には既に行なわれた事実を示す句が来るが、理由を示す意味合いの強いものが多い。#18の $\alpha$ 「こんなに外来語が入ってきた」も $\beta$ 「伝統的な日本語が失われてしまう」の理由を示している。 $\beta$ には、仮定条件のテハと同様に悪い事態を示す句が来る。

(16) テハ（反復を示すもの）

#19 私は帰ろうとしては佇み帰ろうとしては佇みしていた。〔初恋 90〕

このテハは動作の反復を示すもので、 $\alpha$ の句末には動詞の連用形、 $\beta$ の句末には動詞が来る。 $\alpha$ と $\beta$ には違う動詞が来るが、データの中には#19の $\alpha$ 「帰ろうとする」と $\beta$ 「佇む」のように逆の動作のものや、連続的な動作のものが多かった。また、#19もそうだが「～ては～」が繰り返し使われることもある。

(17) トハ（定義を示すもの）

#20 集合とはものの集まりである。〔数学 44〕

このトハは、 $\alpha$ に体言または体言相当の句が来て、 $\beta$ の句で $\alpha$ を定義づける表現である。 $\beta$ の句末がダやデアル、スルコトダ、スルモノダなどの断定的なものであることがこの表現の特徴である。また、定義を示すので $\alpha = \beta$ の関係が成り立つ。#20の $\alpha$ は「集合」、 $\beta$ は「ものの集まりである」となる。

(18) トハ（主題を示すもの）

#21 竹馬の友であられるとは、まったく意外でした。〔手紙 18〕

このトハは、 $\alpha$ に体言または体言相当の句が来て、 $\alpha$ を主題化している表現である。 $\alpha$ には#21の $\alpha$ 「竹馬の友であられる」のように客観的な事実が来て、 $\beta$ には#21の $\beta$ 「まったく意外でした」のように $\alpha$ の事実についての話者の判断を示す句が来る。したがって $\beta$ には感情や考えを示す語句が含まれる。

(19) トハイエ

#22 とはいえ、彼女の思いがどこか遠くにあることは私にはわかった。〔初恋 70〕

#23 大学生になったとはいえ、だいたい甘ったれやの愚息です。〔手紙 11〕

トハイエは逆説的な意を含み、文の水準の接続と句の水準の接続を担う表現である。#22は文の水準の接続の例で、 $\alpha$ は前文なのでここには現われていない。 $\beta$ はトハイエ以降の文であり、前文と矛盾する内容であることになる。#23は句の水準の接続の例で、 $\beta$ 「だいたい甘ったれやの愚息です」は $\alpha$ 「大学生になった」と矛盾する内容である。



(20) ニハ（尊敬表現）

#24 皆々様にはいかがお過ごしでいらっしゃいますか。〔手紙 13〕

$\alpha$ に尊敬すべき人物や敬称が来て、ニハを使うことによってその語に尊敬の意を示している。#24では $\alpha$ 「皆々様」にニハがついて尊敬の意を表わしている。尊敬表現であるので、#24の $\beta$ 「いかがお過ごしでいらっしゃいますか」のように $\beta$ にも敬語表現が使われる。なお、この表現は現在では手紙文のほかにはあまり見かけない。

(21) ナイコトニハ（仮定条件）

#25 何か手を打っておかないことには後で始末がつかなくなる。〔表現 90〕

ナイコトニハは仮定条件を示す表現で、 $\alpha$ の句のようなことをしなければ、 $\beta$ のような悪い結果になってしまうということを示している。#25では $\alpha$ が「何か手を打っておく」で $\beta$ が「後で始末がつかなくなる」である。なお、仮定条件しか表わさないので $\alpha$ も $\beta$ も過去形にはならない。

(22) ニハ（並立助詞的なもの）

#26 行くには行くが、少し遅れる。〔文法 272〕

$\alpha$ には体言相当の用言、 $\beta$ には $\alpha$ と同じ用言を含む句が来る。#26では $\alpha$ が「行く」、 $\beta$ が「行く」であるが、この例のように、必ず $\beta$ の後にはガやシカシなど逆説の意の語が続く。 $\beta$ で文が終わる場合でもその後続く文の文頭にはシカシなどの逆説の意の接続詞が来る。

(23) ニハ（目的を示すもの）

#27 これを計算で求めるにはこのように考えるとよい。〔確率 84〕

$\alpha$ が目的を示し、その目的を達成するためにすべきことを $\beta$ で示している。#27では $\alpha$ 「これを計算で求める」ために $\beta$ 「このように考えるとよい」と言っているのである。#27のように、 $\beta$ の句末はスルトヨイやナケレバナラナイなどの表現が多い。なお、 $\alpha$ の文法的条件を埋込句としたのは、 $\alpha$ がニハの直前に来うる「ため」などの体言を修飾する句であると考えたからである。

(24) カラニハ

#28 その鳥を撃ち取ったからには食べるべきだ。〔表現 100〕

$\alpha$ に客観的事実や結果の描写が来て、それに対する話者の判断を $\beta$ で示す表現である。#28は $\alpha$ 「その鳥を撃ち取った」という事実に対し、 $\beta$ 「食べるべきだ」という判断が下されている。#28のように $\beta$ の句末はスベキダやツモリダなどの判断を表わす表現になることが多い。

#### 4. 結び

以上、慣用表現について考察した結果を述べてきたが、最後に、1で提示した問題を2の表1にしたがって弁別してみよう。

A 世捨て人とは世を捨てた人ではない、世が捨てた人である。

B 世捨て人とは友達になりたくない。

A, Bとも文法的条件は一緒になるが, Aは句末が断定的であり, 「世捨て人」=「世を捨てた人」が成り立つので定義を示すトハになる。このように扱った表現についてはその表現の特徴などを考察することにより, 弁別の条件を明らかにできた。

本稿の結果として明らかになった意味的な条件は, 計算機で検証する場合, 形の上からでは識別しにくい慣用表現の補助的な情報として役立つであろう。

(付記)

本稿執筆にあたり, 丁寧にご指導いただきました丸山直子先生, 水谷静夫先生に心から感謝の意を表します。

(ねづ ひとみ 1990年日文卒)